

Newsletter

No.9

設立20周年記念号

財団設立 20 周年に思うこと

財団法人 精神・神経科学振興財団 会長 杉田 秀夫

財団法人 精神・神経科学振興財団が発足して 20 年を迎えました。20 年。長いようで、短い 20 年でした。今、20 年前のことを思い出しています。

20 年前わたしは(現)国立精神・神経医療研究センター神経研究所所長でした。研究所には若い研究者が急に増えてきていました。神経研究所の存在が世に認められ、魅力ある研究が花開いていたからだと思います。わたしに関係する筋ジストロフィーもデュシェンヌ型筋ジストロフィーの遺伝子がクローニングされてから 5 年がたち、その機能解析、関連蛋白の研究が盛んでした。研究成果はどんどん出て、国際誌にも次々と発表され、センター神経研究所の評価は高まる一方でした。

多くの研究者は、国際学会に発表し、広く評価をうけたいと望んでいました。しかし、当時の厚生省の研究費や文部省の科学研究費は学会出張経費を認めていませんでした。当然のことながら、国際学会に出席の旅費、滞在費とも自己負担でした。がんセンターには財団があ

り、出張費を援助しているとの話を聞きました。われわれのセンターにも財団が欲しいと思っていました。初代理事長の島菌先生や、里吉先生らが努力され、20 年前に財団が発足したときの感動は今でも忘れません。ただ、財団が

出来たからといってすぐに研究助成金が出てきたわけではありません。財団の基盤はまだ弱く、そこまでの余裕は無かったのでしょう。でも、出版事業などに助成金が出され、財団は精神、神経科学研究推進の力を次第に発揮するようになりました。

財団を今のように大きく力あるものにされたのは故里吉栄二郎先生のご努力が大きかったと思います。先生はほとんど毎日財団に顔を出され、財団の運営資金を集める努力をされました。先生は学問的にも優れた方でした。わたしと同じ筋疾患を専門にしておられ、有名な里吉病(全身こむら返り病)の発見者でもあります(財団 Newsletter 5 号に詳しく紹介されています)。昨年世界されたこと、本当に残念でたまりません。20 周年を振り返っての思い出話をお聞きしたかったです。

財団は現高橋理事長の指導の下、若手研究者への研究助成金の交付、研修会への援助など幅広い事業を展開しています。財団主導型プロジェクトも進んでいます。東北地方を襲った地震・津波災害には財団からいち早く、医療関係者の派遣などに援助の手を差し伸べました。財団はこれからも精神、神経疾患研究推進のため大きな役割を果たしていきたいと思っています。今後とも、財団発展のために皆様方のご支援、ご助言をいただきたく伏してお願いする次第です。



○○○○ 設立 20 周年記念号 ○○○○

P.1 (巻頭言) 財団設立 20 周年に思うこと

(財) 精神・神経科学振興財団
会長 杉田 秀夫 先生

P.2 - エキスパートに聞く その 8 -
「睡眠障害」

(財) 精神・神経科学振興財団
理事長 高橋 清久 先生

P.7 財団からのお知らせ

P.8 編集後記